

新規実施項目のお知らせ

謹啓 時下ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
平素は格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。
このたび、下記の検査項目を新たに受託開始いたしますので、
ご利用いただきたくご案内いたします。
当社におきましては、皆様のご要望に幅広くお応えすべく研鑽
を重ねてまいりますので、今後とも引き続きお引き立てのほど、
よろしくお願い申し上げます。

敬 白

記

◆実施日

平成25年4月1日（月）ご依頼分より

◆新規項目内容一覧

項目コード (統一コード)	検査項目	検体量 (mL)	容器	保存 (安定性)	所要 日数	実施料 判断料	検査方法	基準値 (単位)	備 考
6471 1	ヒトパピローマウイルス DNA(16型、18型、その 他ハイリスクグループ)	子宮頸部 3.0	f4	冷蔵	3~6		PCR (リアルタイム PCR)	16型 陰性 18型 陰性 その他ハイ リスクグ ループ 陰性	測定対象は16型、18型、その 他ハイリスクグループ(31、 33、35、39、45、51、52、 56、58、59、68型および 66型)です。「その他ハイリ スクグループ」については、型 別の判定ではありません。 必ず専用容器で採取してご提 出ください。 他項目との重複依頼は避けて ください。 検体に血液が混入してい ると、データに影響を及ぼす場 合がありますので、ご注意く ださい。

●ヒトパピローマウイルスDNA(16型、18型、その他ハイリスクグループ)

12種類のハイリスクグループの検出とともに、特にリスクが高い16型、18型を個別に検出します。

子宮頸がんは、ヒトパピローマウイルス(HPV)ハイリスク型を、持続感染することにより発症します。早期発見と進展リスクに応じた診療のために、HPVハイリスク型の感染有無の情報が重要となってきます。

このたび、従来のハイリスクグループ(31、33、35、39、45、51、52、56、58、59、68型)に66型を加え、さらに、特にリスクが高いため、HPVワクチンの予防対象となっているHPV16型と18型を個別に検出する本検査を受託開始いたします。

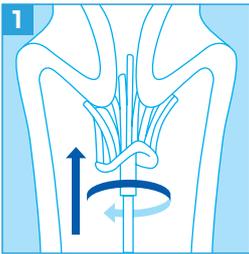
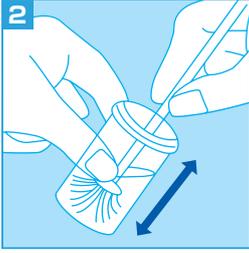
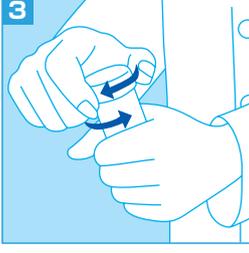
▶対象疾患

●子宮頸がん

▶関連項目

●細胞診(婦人科)〔ベセスダシステム〕
●ヒトパピローマウイルス(HPV)DNA型判定
(ハイリスク13種)

▶検体採取方法

容器形態	検査項目
(容器記号)f4  内容 メタノール 35%含有 貯蔵方法 室温 有効期間 1年	ヒトパピローマウイルスDNA (16型、18型、その他ハイリスクグループ)
	検体取り扱い方法
	<div style="display: flex; align-items: flex-start;"> <div style="flex: 1;">  <p>1</p> </div> <div style="flex: 2;"> <p>子宮頸部の細胞を採取する 綿棒以外の採取器具(ブラシ、スパーテル)を用いて細胞を採取してください。</p> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: flex-start; margin-top: 10px;"> <div style="flex: 1;">  <p>2</p> </div> <div style="flex: 2;"> <p>細胞を洗い落とす 採取器具を容器に入れ、容器の底で採取器具の先端が広がるように10回程度押し付けた後、強かき回して採取した細胞を洗い落とししてください。</p> </div> </div> <div style="display: flex; align-items: flex-start; margin-top: 10px;"> <div style="flex: 1;">  <p>3</p> </div> <div style="flex: 2;"> <p>しっかりフタを閉める 採取器具を取り出し、しっかり蓋をして検体を冷蔵保存してください。 (注)採取器具の先端は容器に残さないでください。</p> <p>【ご注意】 妊婦より細胞を採取する場合は、安全性を考慮し、ブラシ等の採取器具の使用は避け、綿棒を使用してください。ただし、綿棒で検査に必要な細胞量を採取するために、採取前に別の綿棒で粘液を除去し、採取に使用した綿棒を保存液中で十分にすすぎ、採取した細胞を洗い落とししてください。容器には綿棒の先端を残さないで冷蔵保存してください。また、綿棒では無理な力がかかると折れる可能性がありますので十分にご注意ください。</p> </div> </div>

●参考文献

三浦 俊昭, 他: 医学と薬学69(1): 157~162, 2013.